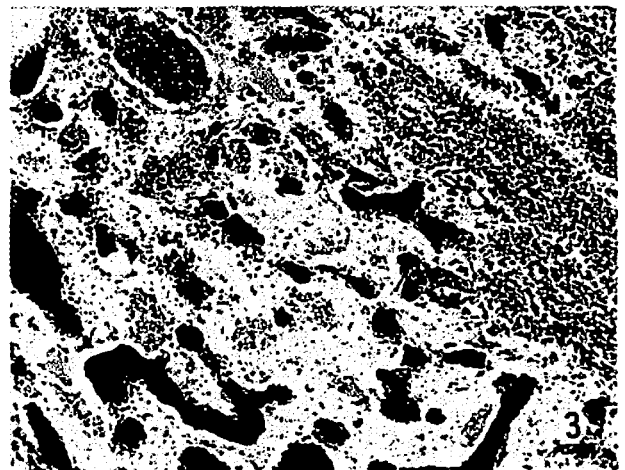
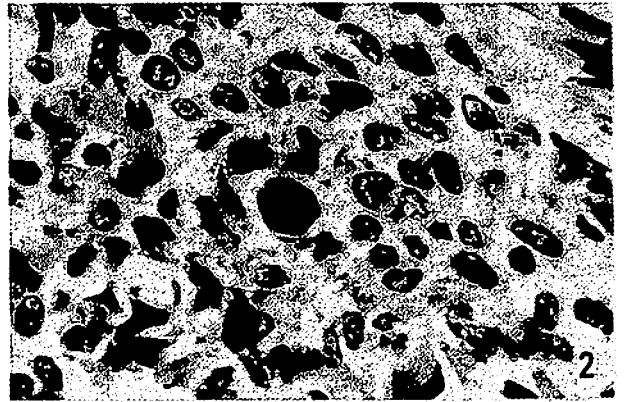
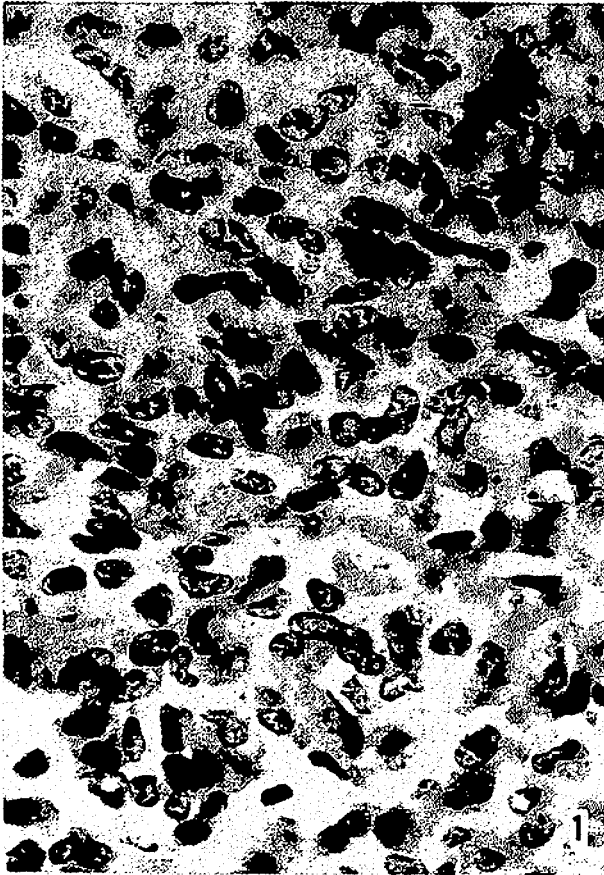


牛のセメント質形成線維腫

岐阜大学農学部家畜病理学教室出題 第21回獣医病理学研修会標本No.338



動物：牛（ホルスタイン雑種），約2歳，性別不明。
臨床事項：下顎前歯部の2手拳大の腫大による咬合障害の他著変は認められない。
剖検所見：腫瘍は左右両側性に下顎前歯部顎骨中心性に生じ，左側を小手拳大，右側を大手拳大に腫大せしめる。前歯は左右とも第1切歯を除き乳歯が残存しており，それぞれかなり位置の異動をきたし，特に左右の第1切歯と第2乳切歯の間は広く離開している。腫瘍実質は充実性で灰白色を呈し，切断極めて容易であるが，所々に硬度強なるざらざらした物質をわずかに混ず。さらに，血液を容れた小嚢胞や裂隙によって実質は分葉状となる。周囲顎骨との境界は明瞭であるが皮質骨は菲薄化し，海綿骨は消失する。
組織学的所見：腫瘍実質は多量の線維芽細胞様の細胞の増殖が特徴で，この細胞は大きく明るい円形ないし楕円形の核を有するが細胞質に乏しい。核の異型性や分裂像は少ない。細胞成分の豊富な領域では細胞間にエオジンに淡染する硝子様性の膠原線維束の微細な網目構造が認められる（図1，HE，×600）。硝子様性の膠原線維の中にはヘマトキシリンに濃染し，極めて微細なセメント質粒の構造を示したり（図2，HE，×600），互いに融合し塊状，梁状となり，さらに，石灰沈着を来たし硬

組織を形成するものもある。この硬組織は円形ないし卵円形を示すものが多く，その基質は強塩基性を示し，封入細胞や周囲の芽細胞も少なくセメント質粒を思わせる（図3，HE，×60）。しかし，時には骨と呼んだ方がよいものや不定形な硬組織もまた形成される。実質内には歯原性上皮成分は全く認められないが，破骨細胞様の多核巨細胞が散見される。血液を容れる大小の嚢胞も形成される。腫瘍に隣接する骨皮質に旺盛な骨吸収が見られる。左右第2切歯の歯杯はいずれにも認められない。全ての歯根並びに歯杯と腫瘍実質との直接の連絡は認められない。

診断：歯原性線維腫の発生由来としては歯乳頭，歯小嚢が考えられ，特に，歯小嚢は，発生学的に見れば歯根膜となり歯槽骨の骨内膜にも相当し，セメント芽細胞の他骨芽細胞をも分化させ得る。この歯小嚢が腫瘍化した場合セメント質や骨から不定形の硬組織までも形成される可能性がある。従って，本症例は，主としてセメント質粒類似の硬組織形成を伴う線維腫という組織像，左右第2切歯の欠如及び歯牙交換期における顎骨中心性の発生等から，左右第2切歯の歯杯特にその歯小嚢由来の「セメント質形成線維腫」と診断された。